第３回「美しい四国づくり委員会」議事要旨

【挨拶＋意見交換】

１．梅原委員長挨拶

「美しい四国づくり委員会」は、素晴らしい四国を、「地域の皆さんと産学官が共同して、さらに美しくしていこう」、「観光・交流などの活性化・振興によって、四国を活性化していこう」、「今までつくってきたストックを活性化して、自然・景観もさらに美しく創造していこう」、「そういうなかで、日本を代表するような美しい地域にしていこう」といった思いで、一昨年の９月にスタートした。

香川県、愛媛県で、１回、２回委員会を行い、そして昨年７月に徳島県でシンポジウムを行った。そこで、「美しい四国づくり」宣言をしました。今度はそれを実行に移していく段階に来た。

故木村尚三郎先生は、豊かな文化を持っている地方が元気にならなければ、日本はいい国にならない。交流がないと、その素晴らしい文化も滅んでしまうということを、ずっと言い続けておられた。

２．「美しい四国づくり委員会」経過報告

３．高知県内における取り組み紹介

（１）「四万十かいどう」の取り組み

中村商工会議所　佐伯達雄専務理事

（２）浦戸湾色彩計画策定の取り組み

高知工科大学社会システム工学科　重山陽一郎助教授

意見交換１

楠瀬委員

紹介事例に共通して言えるのは、キーマンというか、リーダーシップを取られる人がいて、皆を動かし、心を動かし、行動にまで駆り立てている。感動が感動を呼ぶというのが、うまいまちづくりになっていき、美しい景色ができあがる。

西村委員

全国でも、色でまちづくり、なおかつ、民間で一生懸命やっていて、活躍しているのは函館。函館はもう 20 年以上前から、カラートラストを、民間の元町倶楽部というメンバーが中心になって公益信託までつくって実施している。

色に関するアドバイスは形を変えたり、高さを変えたりとかというのに比べると、あまりコストが変わらないということもあり、説得力のある理屈があれば割合聞いていただける。美しいものをつくっていくときには、最初の手がかりとして、割合有効である。

４.「美しい四国づくり」の実現に向けて

（１）「美しい四国づくり」の現状

意見交換２

西村委員

最近注目すべき動きとして防護柵の色を変えるガイドラインが出たことがある。今までは安全のために白としていたが、地域のことを考えて色を変えてもいいと言うのは大きな転換のような気がする。例えば、視覚障害者のための黄色の誘導ブロックについても同様なことが考えられる。景観に関する議論の仕方が１つ上のステップに入っている。

井原委員

地域の活性化には、地域への愛着心が大事と言われる。アンケート結果によると地域への愛着を構成する要因は、原風景とか美しい風景となっている。

四国の美しさが大切というときには、四国の美しさのコンセプトをしっかりと捉えておく必要がある。四国で守るべき「温かい美しさ」、「優しい美しさ」、「安らぎのある美しさ」について検討したらどうか。ボランティアの皆さんによってつくられる美しさは、まさに四国らしい。人が自然や歴史に働きかける美しさを四国では、大切にしたらどうだろうか。人が自然に働きかける美しさが四万十、人が歴史に働きかける美しさが浦戸湾の例なのではないか。

北九州市と下関市は県が違うが、両方で同一の文案からなる関門景観条例を制定し、自治体を越えて景観に関する基本構想を造っている。整備局が中心となり四国各県でコンセプトのしっかりした景観条例を統一的につくることができないかと思っている。

立木委員

徳島県の上勝町では、林業の後継者がいなくて、山が荒れ放題になっていたところに、花とか葉とか商品になるものを植えていって、結果として村の景観がものすごく美しくなっている。桜の花についても開花時期をずらして長く出荷するためにいろいろな桜を植えた結果、商業活動の結果が景観に結びついている。

ボランティアの方が楽しみながら、結果として美しくなるなど、美しい四国づくりのプロセスは、いろいろある。

黒木委員

四万十の取り組みは、温かい美しさが素直に表現されていると感じた。

住民の方がいろいろやっているのを、推進協議会でコーディネートして、組織化して発信しているところに感心した。都市部に行くと利害関係とか難しい問題が出てきて簡単にはいかない。行政だけでなく、経済界のバックアップがあるとスタートしやすい。

楠瀬委員

景観というのは、自然も人工物も、両方とも人間の力をちょっと加えてやらないと美しさは保てない。東京・大阪と異なり、四国には建物の背景に山や空や海や川がある。人工物を自然に寄り添わせる、調和させることも考えなければいけない。それが四国に共通した背景である。

佐伯理事

四万十川には、四万十川条例というものができた。条例は罰則がなく、守らなくても何も問題がないが、自らが四万十川を守っていく取組をしなければならない。今の四万十川沿いにも派手な看板がいっぱいまだ残っていて、１つ１つ手を付けて直していただくような動きをしていかないといけない。私たち民間は、行政の方に条例をつくっていただいたり、支援していただいて、自らが少し手を加える運動をやろうとしている。

重山助教授

住民の方々の活動が取り上げられるようになってきたが、かつての主役であった行政マン、コンサルタントの役割も重要。景観に関する見識が向上するよう、委員会等で方向性を議論してはどうか。

石田委員

これからは地域の方が自治体も含めていろいろ活動されて、どうしてもうまくいかないところを国が支援すると成果が出やすいのではないか。
基本的には、地域の方々に斬新な、地域の情報に基づいた活動をいろいろしていただいて、そういったものを四国全体に広めるとか、全国に発信する。それから、どうしても住民の方だけでは動かせない制度的な問題とか、法令とか、自治体をまたぐような問題を国が相談に乗るということになるのではないか。

北橋局長

地域の皆さんが元気でがんばっているところには、行政もできる限り応援したい。景観の観点から行政がどういう応援をするという宣言を是非したいが難しい。ガードレールや消波ブロックであれば、計画的に自分達でやろうと思えばできるが、電線・電柱の地中化は、コストの関係でハードルが高く広がっていかない。屋外広告物は民に対する規制であるため、どんな支援ができるか一番悩ましい。

梅原委員長

九州の人の観光は、７割が九州を観光する。四国の人はほとんど四国から出て行くことが観光だと考えている。それはこの素晴らしい四国のことを四国の人が知らない、特に他県のことを知らない、これが最大の問題だろう。

西村委員

世界遺産特別委員会の選定委員だった。「四国八十八ヵ所と遍路道」は非常におもしろいと評価が高かった、あと一歩だった。

八十八全部が国の史跡とか重文になるのは難しいが、遍路道を帯みたいに考えて、地域全体をつなぎ、八十八全部で１つの文化財として、セットとして非常に大事なものと考えると良くなると思う。

（２）美しい四国づくり」の情報発信

意見交換３

井原委員

四国を歩くと、山にも川にも、海の風景にも、こんなに暖かくて優しい美しさを得ることができますよ、というような１つのコンセプトで売り出すことが大事で、明確化を図った情報発信が必要。また、単に美しいだけでなく、他と差別化した戦略みたいなものが必要。

景観とか風景とかは地域活性化の源となりサービス産業にとっては重要な要素となることから、美しさを構築すると、経済効果をもたらすという要素を加味した情報発信が必要。

景観条例は、緩やかでいいから、四国を官民挙げて美しい地域にするんだという意思として、明確化を図っていただければありがたい。

北橋委員

情報発信するためには、自分の地域の良さを知る必要がある。

四国の方は、自分の地域の良さがまだよく皆さんわかっていないので、発信すべき具体的な情報をもっていないのでは。

石田委員

日本の観光客の３％が四国にくるが、外国人はわずかに１％。

これからは、世界の地域との競争になる。

観光は、大規模な工業誘致をしなくても、すぐ経済効果があるが、世界的にオンリーワンというところを見極める必要がある。ここが世界で一番とかそういうところを地元の方と一緒に点検していただいて、日本だけではなく、世界の人に来てくださいというようなところを探し、つなげていく（芸術とか、絵画館とかで４県を結ぶ）。八十八ヵ所のように、お接待、心の癒しとかは世界に誇る魅力になると感じている。

立木委員

地元の方は、具体的な情報を持っていても分かっていないのが現状。

上勝には、「山とおばあちゃんしかいない」寂れてしまうばかりから、「山とおばあちゃんがいる！」に発想を転換して成功した。それに気づくきっかけは、中からの発信と外からの評価でうまくできたと思う。

これからの観光は安く買いたたいて、どこに行ったのかも分からずに、ゴミだけを捨てていくようなお客はいらない。

深く狭く高く売る観光というか、ボリュームでなく質で行くような観光がこれからの観光となる。景観ももちろんだが、人とのかかわりとか感動がプラスになる。

佐伯理事

情報発信については、手法は非常に簡単にできるが、発信すべき情報を四国の人は持っていない。四国には、田舎にしかない「青い空」、「緑の山並み」、また、自然そのままの四万十川などがある。普段見慣れている風景そのものが素晴らしいもので、それを如何に情報発信するかを認識することが必要。

梅原委員長

情報発信するためには、自分の住んでいるところの良さを知ることだと思う。知らなければ発信できない。よそ者の目で気づくと、四国は本当に宝の山だとわかる。磨いていくと宝石ということになり、発信しようとする気持ちになる。ふるさと自慢ができるような気持ちを持っていないと発信する気にならない。

黒木委員

マスコミの人間として思うのは情報の深さ、情報の核というのが一番必要で、お手伝いしなければと思っている。四万十川の事例で出た「アシズリサクラ」という言葉だけでサクラを見たくなる。もう一つは「人」。コアとなる人を中心的に見つけると報道しやすい。

（３）「美しい四国づくり」モデルプロジェクト

意見交換４

北橋委員

具体的にいろいろな活動をされているグループ等にきていただいて、先生方から個々具体にアドバイスをいただきながら、共通的なポイントをさぐっていければいいなと思う。応募していただいてやるのがいいのか、事務局が適宜選定してやるのがいいのかちょっと悩ましい。

西村委員

今実際に動いているプロジェクトで、公的なサポートがないと動かないところ、民間だけでは動かない部分に公的なサポートを使うというもの。ある程度の活動を評価して、次のアイディアを我々ももらえるようなサポートもあるのではないか。

また、四国にとって大事だというアイディアをもらうというのもあると思う。自分達のまちにとって、夢があり、何かいろいろな形で実現して欲しいというようなものを拾って、行政のサポートやプレーヤーがうまく連携するなかで実現していけるよう努力してもらって、応募して下さった方に返す。また、知恵を共有する仕組みがあるとレベルアップしていける。シーズはあるのだから、モデル的な例示があれば、今まで思っていたけれど自分だけではやれない、でも誰かが仲間になれば、行政が力になってくれればできるかもしれないものに対して、イマジネーションが広がるのではないか。

梅原委員長

いろいろなご意見を踏まえて、事務局で検討して公募作業に入っていただきたい。

20 世紀は高度成長のなかで文明の時代でしたが、これからの時代は文化が“美しさ”に象徴されるんじゃないか。「“美しさが”が金になる」というよりも「“美しさ”がなければ金にならない」、「文化がなければ金にならない」という、そういった時代が来ているのではないか。

「美しい国、日本」のモデルを四国で実現していきたい。